琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「俊寛」考

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/973

芥川龍之介「俊寛」考

小 澤 保 博*

A consider on Ryunosuke Akutagawa's Syunnkann

Yasuhiro OZAWA*

1

「六の宮の姫君」(「表現」大正11年8月)については「この題材を捉えたのは流石に彼の眼光の鋭さを語るものであろう。ただ原話がすぐれているだけに、彼の手柄はそれだけ少ない。」(吉田精一「芥川龍之介」新潮文庫)という評価があるが、「今昔物語」(「巻十九第五話」「巻十五第四十七話」)の同じ素材を典拠にした堀辰雄「曠野」(「改造」昭和16年12月)さらに菊池寛「六宮姫君」(「新今昔物語」昭和21年11月)の三人の作品を比べた場合、芥川龍之介「六の宮の姫君」が優れていて、三作品の作品評価はおそらく発表順であろう。

これに反して「俊寛」(「中央公論」大正11年1月)は、倉田百三「俊寛」(「白樺」第一幕、大正7年3月)さらには菊池寛「俊寛」(「改造」大正10年10月)の影響下に執筆されたもので、作品評価はこれもおそらく発表順であり、芥川龍之介「俊寛」が一番見劣りするであろう。

「彼の知恵のいたずらとも云うべき作品である。俊寛の新解釈は、当時倉田百三、菊地寛によって試みられていたが、龍之介はこの二人の作を念頭に置き、彼等とは違った逆説的な解釈をこころみた。彼の描いた俊寛は機知に富んだ好色家である。そして、文明、都会のわずらわしい対人関係や、煩瑣な家庭生活から開放され、未開自然の島の生活に安住の地を見出したゴウガンのような人間であった。」(「芥川龍之介」吉田精一)

この吉田精一(「新潮文庫」)の解説は、妥当なもので二番煎じの汚名を免れ得ないであろう。この件については芥川龍之介自身が、「無限抱擁」の主題を滝井孝作から借用して「藪の中」を創作したことに関して釈明している(「純潔―『藪の中』をめぐりて―滝井孝作)

「澄江堂雑記」(十二「俊寛」)は、小説「俊寛」の執筆数ヵ月後に書かれたもので作者自身による自作解説として読むことは、可能である。「新潮」(大正11年4月)掲載のこの解説に拠れば、芥川龍之介「俊寛」の素材は、「平家物語」「源平盛衰記」近松門左衛門「平家女護島」倉田百三「俊寛」菊池寛「俊寛」等の作品である。この中で作品執筆の直接動機になったのは、第一高等学校の同級生倉田百三、菊池寛の二人の「俊寛」である。このことは芥川龍之介「俊寛」(一)で、二人の先行作品「俊寛」を批判的に要約して紹介していることからも理解できる。

「或琵琶法師が語つたのを聞けば、俊寛様は御歎きの余り、岩に頭を打ちつけて、狂ひ死をなすつてしまふし、わたしはその御死骸を肩に、身を投げて死んでしまつたなどと、云つてゐるではありませんか？又もう一人の琵琶法師は、俊寛様はあの島の女と、夫婦の談らひをなすつた上、子供も大勢御出来になり、都にいらしった時よりも、楽しい生涯を御送りになつたとか、まことしやかに語つてゐました。」

先の琵琶法師が倉田百三であり、後の琵琶法師が菊池寛であることは言うまでもない。

*国語科教育教室

「渭水茂『俊寛』像の系譜」（芳賀書店「批評と研究芥川龍之介」昭和47年11月）は、芥川龍之介「俊寛」を重要な作品として最初に位置づけた論考であるが、この先学の論考に導かれて以下考察を進める。「俊寛」執筆の数ヵ月後の「澄江堂雑記」（十二「俊寛」）は、自作「俊寛」についての芥川龍之介自身の自註、解説であるが、このような解説を作品執筆の数ヵ月後に付け加えなくてはならなかったところに自作についての作者自身の負い目を見ることは可能であろう。以下、作品「俊寛」の解説文たる「澄江堂雑記」（十二「俊寛」）に沿ってみていく。

「平家物語や源平盛衰記以外に、俊寛の新解釈を試みたものは現代に始まった事ではない。近松門左衛門の俊寛の如きは、最も著名なものの一つである。

近松の俊寛の島に残るのは、俊寛自身の意志である。丹左衛門尉基康は、俊寛成経康頼等三人の赦免状を携へてゐる。が、成経の妻になった、島の女千鳥だけは、舟に乗る事を許されない。正使基康には許す気があつても、副使の妹尾が許さぬのである。妻子の死を聞いた俊寛は、千鳥を船に乗せる為に、妹尾太郎を殺してしまふ。『上使を斬りたる咎によって、改めて今鬼界が島の流人となれば、上の御慈悲の筋も立ち、御上使の落度いささかなし。』この英雄的な俊寛は、成経康頼等の乗船を勧めながら、従容と又かうも云ふのである。『俊寛が乗るのは引誓の船、浮世の船には望みなし。』（中略）

附記　盛衰記に現われた俊寛は、機知に富んだ思想家であり、鶴の前を愛する色好みである。僕は特にこの点では、盛衰記の記事に忠実だった。又俊寛の歌なるものは、康頼や成経より拙いやうである。俊寛は議論には長じてゐても、詩人肌ではなかったらしい。僕はこの点でも、盛衰記に忠実な態度を改めなかった。又盛衰記の鬼界島は、たとひタイティではないにしても、満更岩ばかりでもなささうである。もしあの盛衰記の島の記事から、辺土に対する都会人の恐怖や嫌悪を除き去れば、存外古風土記にありさうな、愛すべき島になるかも知れない。」（「澄江堂雑記」十二）

「澄江堂雑記」（十二「俊寛」）についての芥川龍之介の説明を要約すると、近松門左衛門「平家女護嶋」は、「苦しまざる俊寛」を創作するために「放免状」（「平家物語」「源平盛衰記」）の記事を変更した。さらに倉田百三「俊寛」菊池寛「俊寛」もそれぞれ「苦しめる俊寛」「苦しまざる俊寛」を創作するために典拠に変更を加えた。前者では、俊寛の娘は死んだことになっており、後者では鬼界島は豊沃な土地である。「苦しまざる俊寛」に与する芥川龍之介「俊寛」は、その典拠を「源平盛衰記」に拠りながら自由な思索者の横顔を垣間見せ、流謫の地に安住して孤独を享受する一人の自由人である。この作品の主題は、芥川龍之介自身が言うように「我等は俊寛と同じやうに、島流しの境遇に陥った時、どう云ふ生活を営むであらうか？」である。

近松門左衛門（「平家女護島」）の俊寛は、「苦しまざる俊寛」創作のために「平家物語」「源平盛衰記」の改変、とりわけ「源平盛衰記」からの典拠離れは著しい。「俊寛が乗るは引誓の船、浮き世の船には望みなし。」（「平家女護島」）、近松門左衛門の浄瑠璃の中で時代物と呼ばれる作品は七十余編あり、「平家女護島」は五段構成のうち鬼界が島の段（「第二段」）は、謡曲「俊寛」に依った場面で、成経と島の女千鳥との恋、「平家物語」謡曲「俊寛」に描かれた俊寛より立派であるところが特徴である。芥川龍之介は、近松門左衛門「平家女護島」の芝居を久米正雄と同伴で観劇して、その折久米正雄が「俊寛が乗るは引誓の船、浮き世の船には望みなし。」（「平家女護島」）の台詞に感激したと芥川龍之介は回想しているが、この時の同伴者は久米正雄ではなくて菊池寛の可能性がある。

2

「平家物語」の俊寛は、「諦めの俊寛」であり、諸行無常、盛者必衰のいわゆる仏教的無常観を基調としているためか、寂しい諦めの境地で人生を終わっている。「源平盛衰記」の俊寛は「平家物語」の俊寛より一層惨めな俊寛であり、「平家物語」の記述を徹底して増幅したかの感がある。近松門左衛門「平家女護島」は、これら軍記物語を再構成するにあたり新機軸を見せた。倉田百三「俊寛」の「苦しめる俊寛」も菊池寛「俊寛」の「苦しまざる俊寛」もさらには芥川龍之介「俊寛」

も全ては近松門左衛門「平家女護島」の影響下にある。

芥川龍之介「俊寛」は、「源平盛衰記」を典拠にしているが、「平家物語」も当然部分的に参考にしている。「榕樹の枝に、肉の厚い葉が光つてゐる、ーその木の間に点点と、笹葺きの屋根を並べたのが、この島の土人の家なのです。（中略）この家にゐるのは琉球人だとか、あの檻には豕が飼つてあるとか、いろいろ教へて下さいました。」（芥川龍之介「俊寛」二）鬼界島が、現在の南西諸島のどの島なのか特定は難しいが、沖縄本島在住二十年を閲した私が読むと「土人」という言葉には抵抗感を覚える。「土人」という言葉には、その土地に生まれて、住んでいる人、土着の人という意味もあるようだが、原始的な生活をしている未開の人、土民に似た言葉の響きがある。

「その芋も存外味は好いぞ。名前か？名前は琉球芋ぢや。」（芥川龍之介「俊寛」三）

薩摩芋といわずに琉球芋と記述したところは、時代考証において的確と言えると思うが、琉球への芋伝来は、1605年とされていて鬼界島への芋の伝播はさらに遅れたはずである。鹿ケ谷の山荘での平清盛討伐の密議が発覚して俊寛が、鬼界ヶ島に流島になる時代の400年以上後のことで、この件についての時代考証は芥川龍之介の完全な錯誤である。

「芭蕉の葉の扇を御手にした儘、」「俊寛様は悠悠と、芭蕉扇を御使ひなさりながら、」（芥川龍之介「俊寛」三）

「芭蕉扇」唐扇の一種。芭蕉の葉鞘を細工して円扇としたものという解説があるが、蓮花洞の怪物、金角大王（「西遊記」）の芭蕉扇を思い出させる。これは沖縄生活で私が、日頃愛用している「クバ扇」のことであろう。「芭蕉扇」については、作者は漢籍の知識の一環として使用したのみで実物を知らないであろう。

「あの女は泣き伏したぎり、何時までたつても動かうとせぬ。その内に土人も散じてしまふ。（中略）そつと後手に抱き起さうとした。するとあの女はどうしたと思ふ？いきなりおれをはり倒したのぢや。」（芥川龍之介「俊寛」四）

鬼界島に取り残された俊寛と藤原成経の取り残された現地妻との意思の疎通が巧くいかない、俊寛が琉球語を全く理解できずにいることを巧妙に記述した場面である。

「船のはひつたのを知らせたのは、この島にゐる琉球人ぢや。それが浜べから飛んで来ると、息も切れ切れに船船と云ふ。船はまづわかつたものの、何の船がはひつて来たのか、その外の言葉はさつぱりわからぬ。（中略）少将や康頼はおれより先に、もう船の側へ駈けつけてゐたが、この喜びやうも一通りではない。現にあの琉球人なぞは、二人とも毒蛇に噛まれた揚句、気が狂つたのかと思うた位ぢや。」（芥川龍之介「俊寛」四）

藤原成経等と薩南諸島の鬼界島に流され、成経等が召還された後も白石島に移され三十七歳で孤島にて死んだ俊寛を描くのに芥川龍之介は琉球諸島を舞台にしている。

「天に仰ぎ地に俯し、悲しみ給へどかひぞなき、・・・・猶も船の纜に取りつき、腰になり脇になり、丈の及ぶ程は、引くかれておはしけるが、丈も及ばぬ程にもなりしかば、又空しき渚に泳ぎ返り、・・・・是具して行けや、我乗せて行けやとて、をめき叫び給へども、漕ぎ行く船のならひにて、跡は白波ばかりなり。」（「平家物語」巻三「足摺」）

謡曲「俊寛」に依りながら少将藤原成経と島の女千鳥と恋愛を絡めて成立した歌舞伎「俊寛」（「平家女護嶋」第二段目）で有名な場面であるが、この悲劇の場面を芥川龍之介「俊寛」では、放免の船に乗って帰る藤原盛経に同伴しようとして直垂の裾に取りすがる現地妻とその子供を少将が振り切ったことへの俊寛の義憤の場面であると解釈する。

「少将は蒼い顔をした儘、邪慳にその手を刎ねのけたではないか？女は浜べに倒れたが、それぎり二度と乗らうともせぬ。唯おいおい泣くばかりぢや。（中略）おれは浜べにぢだんだを踏みながら、返せ返せと手招ぎをした。」（中略）「あの時おれが怒りさへせねば、俊寛は都へ帰りたさに、狂ひまはつたなぞと云ふ事も、口の端へ上らずにすんだかも知れぬ。」（芥川龍之介「俊寛」四）

「平家物語」最大の悲劇性を持った俊寛「足摺」の場面をパロディー化することで作者は菊池寛「俊寛」とは別の「苦しまざる俊寛」の創作を意図したわけである。

芥川龍之介「俊寛」は、大筋で「源平盛衰記」に依りながら部分的には「平家物語」を使っているが、有名な俊寛「足摺」(「平家物語」巻第三)の他には、有王との再会の場面が引用されている。この場面も「平家物語」では有名な場面であるが、芥川龍之介「俊寛」においては誤解であるとしている。

「童かとすれば年老いてその貌にあらず、法師かと思へば又髪は空ざまに生ひ上りて白髪多し。よろづの塵や藻屑のつきたれども打ち拂はず。頸細くして腹大きに脹れ、色黒うして足手細し。人にして人に非ず。」(「平家物語」巻第三「有王」)

「平家物語」の俊寛僧都と有王との劇的対面の悲劇的場面も、作り事ということになり、芥川龍之介「俊寛」では、二人の対面は次のように滑稽としたものである。

「僧都の御坊！よく御無事でいらつしやいました。わたしです！有王です！」「おお、有王か！」ということになる。

3

「平家物語」の作者によれば、俊寛の悲劇は主として性格悲劇である。「かゝる人の孫なればにや、此俊寛も僧なれども、心もたけく奢れる人にて、よしなき謀叛にもくみしけるにこそ。」(「平家物語」巻第一「俊寛沙汰」)俊寛僧都について「平家物語」のこの記述は「源平盛衰記」の作者もそのまま踏襲している。

「丹波少将・康頼入道は、もとより熊野信じの人々なれば、『いかにもして、此島のうちに熊野の三所権現を勧請し奉て、帰洛の事を祈申さばや』と云に、俊寛僧都は、天性不信第一の人にて、是をもちゐず。」(「平家物語」巻第二「康羅祝詞」)

「平家物語」の作者は、俊寛僧都の悲劇を「天性不信第一の人」という性格悲劇に帰している。これに反して成経、康頼の二人は「熊野信じの人々」が故に帰還することが出来た。

「康頼入道先達にて、丹波の少将相ぐしつつ、日ごとに熊野まうでのまねをして、帰洛の事をぞ祈ける。」この二人の流人が帰還できたのは、彼等二人の信仰心によると「平家」の作者は考えている。

「かゝる人の孫にて此俊寛も、僧ながら驕つゝ、・・・・」(「源平盛衰記」)、俊寛僧都の悲劇を自身の性格悲劇と見る視点は「平家物語」と同じであるが、「源平盛衰記」の俊寛は、信仰について独自の主張をしている。芥川龍之介「俊寛」は、より多く「源平盛衰記」を典拠にしているが、彼の創作した俊寛は、作中至る所で釈尊との対話を試みている。言い換えれば、鬼界島で「熊野まうでのまねをして」帰還した二人に対して「源平盛衰記」の俊寛は、鬼界島での成経、康頼の二人の本地垂迹的精神を批判した。作中至る所で釈尊との直接会話を重ねる芥川龍之介「俊寛」は、「源平盛衰記」で本地垂迹的精神を批判する俊寛の直接の反映である。

「丹波の少将のしうと平宰相の領、肥前の国鹿瀬庄より、衣食を常におくられければ、それにてぞ俊寛僧都も康頼も、命をいきて過しける。(中略)丹波少将・康頼入道は、もとより熊野信じの人々なれば、『いかにもして、此島のうちに熊野の三所権現を勧請し奉て、帰洛の事を祈申さばや』と云に、俊寛僧都は、天性不信第一の人にて、是をもちゐず。」(「平家物語」康頼祝詞)

「平家物語」では、成経の縁戚教盛の領地肥前の国鹿瀬庄より、衣食が送られて他の二人はこれに寄食していたと記述されている。「源平盛衰記」では、三人は鬼界島十二島に(康頼「ちとの島」俊寛「白石の島」成経「硫黄島」)、最初別々に流されながら硫黄島の成経に合流したと記載されている。

康頼が鬼界島の岩殿を熊野権現に見立て、成経を誘って祈願してその結果として夢に帰還の予兆を見るのに反して俊寛一人は、他の二人の行為に与しない。「俊寛僧都は、天性不信第一の人にて、是をもちゐず」(「平家物語」)と簡潔に説明されている箇所について、「源平盛衰記」では、岩殿を熊野権現と見立て参詣する他の二人の行為に対して俊寛一人が与せざる理由を宗教的教理により説明している。

「自土の外に浄土なし。三界一心と知ぬれば、地獄天宮外になし、心仏衆生一体と悟ぬれば、始覚本覚身を離れず、自性の本仏もとより己身に備と観ずれば、無窮の聖応響の声に応ずるが如し。(中略)神明外になし、只我等が一念也、垂迹他に非、専自己の本宮にありなんと、(中略)詠じ

て只仏法を修行して、今度生死を出給べし、」（「源平盛衰記」理巻第九）

芥川龍之介「俊寛」は、作品冒頭にこの部分の一文をエピグラフに使っている。「源平盛衰記」の俊寛は仏法の正統的悟りを求める立場から鬼界島の岩殿を熊野権現と見做す安易な本地垂迹的な精神を批判し、法華経を念じて極楽浄土を希求するか、自力によって成仏し現世を超越すべきであるとしている。これに反して「平家物語」の俊寛は、生まれついたときから信仰心がないために（「天性不信第一の人」）が故に、康頼が熊野三山の霊を鬼界島の岩殿に移して祀る安易な本地垂迹的行為を批判した。多く「源平盛衰記」を典拠とする芥川龍之介「俊寛」は、成経、康頼の二人が無事に都に生還した後、鬼界島十二島の奥七島の一つである硫黄島に一人残され、自ら釈尊と直接対話をすることになるのである。

「一高時代の同窓の三人が競作した形となった」（浅井清）と指摘される芥川龍之介「俊寛」であるが、倉田百三「俊寛」菊池寛「俊寛」は、その作品化を成功と見做され芥川龍之介「俊寛」は、「創作化する必要がなかった」（「近代作家と古典」志村有弘）と酷評されているが、芥川龍之介「俊寛」には、宗教教理上の独創的な箇所がある。「源平盛衰記」の俊寛は、硫黄島の岩殿を熊野三山と見做し、神仏に祈ることで帰還に成功した康頼等の行為そのものを、権現、本地垂迹的精神そのものを批判しているのである。「源平盛衰記」を典拠にして創作された芥川龍之介「俊寛」は、鬼界島を彷徨しながら直接釈迦と向かい合い、自問自答するのである。

芥川龍之介「神神の微笑」（「新小説」大正11年1月）の主題について、「いかなる外国の宗教も思想もそこへ移植すればその根が腐り、その実体が消滅し、外形だけはたしかに昔のままだが、実は似而非なるものに変わってしまう日本の精神的風土を指摘していることだ。」（遠藤周作「『神々の微笑』の意味」）という解説がある。これは遠藤周作「沈黙」（「新潮社」昭和41年3月）についての自作解説の意味合いの一文であるが、「沈黙」の主人公司祭ロドリゴも禁教と迫害の日本での潜伏中、イエスと直接に向かい合いキリスト教の教理について根源的な懐疑を抱き、自問自答を繰り返すのである。遠藤周作「沈黙」創作の折、山野を彷徨する司祭ロドリゴがイエスと向かい合う姿を創造するにおいて遠藤周作は、芥川龍之介「俊寛」が、鬼界島の山野で権現、本地垂迹的思考について根源的な疑問を抱く姿を参考にした可能性がある。

俊寛は、西行と同時代の同じ仏教徒であるが、西行の信じた仏教は神道と一体化した仏教、本地垂迹説の神仏習合の仏教である。インドを本地とする菩薩、如来が日本に垂迹して日本の神になったという本地垂迹説。西行も俊寛も基本的には、同じ神仏習合の仏教徒でありながら、「源平盛衰記」の俊寛は、本地垂迹説を批判している。芥川龍之介「俊寛」に何かしら独創的な箇所を見出すなら、俊寛が日本に垂迹する以前の本来の如来、釈迦如来の挿話を紹介していることであろう。

「三界六道の教主、十方最勝、光明無量、三学無碍、億億衆生引導の能化、南無大慈大悲釈迦牟尼如来も、三十二相八十種好の御姿は、時代毎にいろいろ御変りになった。」（芥川龍之介「俊寛」二）

成経、康頼の二人が鬼界島の風物に馴染めず、俊寛のみ鬼界島の現実に直接接することで意識は都の生活に引かれながら、肉体が鬼界島の生活に直面していく場面である。

「世尊さへ成道される時には、牧牛の女難陀婆羅の、乳糜の供養を受けられたではないか？もしあの時空腹の儘、畢波羅樹下に座ってゐられたら、第六天の魔王波旬は、三人の魔女なぞを遣すよりも、六牙象王の味噌漬けだの、天龍八部の粕漬けだの、天竺の珍味を降らせたかも知らぬ。（中略）『取彼乳糜如意飽食、悉皆浄尽。』－仏本行経七巻の中にも、あれ程難有い所は沢山あるまい。－『爾時菩薩食糜已訖従座而起。』」（芥川龍之介「俊寛」三）

俊寛が有王に向って鬼界島特産の御馳走を披露している場面である。芥川龍之介「俊寛」において俊寛が釈尊の事例を取り上げているのは、いずれも俊寛自身が自身の肉体で鬼界島の現実の生活に直接向かい合った場面である。軽妙な語り口の中にも俊寛は、鬼界島の現実の生活習慣、食習慣に馴染もうとするとき、都での生活習慣を忘却するかもしれない不安の念を覚えて釈尊に思いを馳

せたのだろう。

「成親卿の許に、松の前鶴の前とて、花やかなる上童二人あり。松の前は容顔は勝れたけれども心の色すくなし。鶴の前はみめ貌は少し後れたれども、心の色今一際深かりけり。（中略）かかりし程に僧都常に通ひて、始めは松の前に志を顕はしけるが、後には鶴の前に思ひ移して、女子一人儲けたりけるとかや。」（「源平盛衰記」巻第三「成親謀叛の事」）

「源平盛衰記」には「平家物語」にない俊寛僧都の個人的なエピソードが付け加えられている。「源平盛衰記」の作者によれば、俊寛僧都は鶴の前に対する執着のために意ならずも謀叛に与してしまったのである。松の前の容貌の美しさに最初心を奪われ、やがて鶴の前の心ばえに心引かれて人生を誤った俊寛僧都の人間像を芥川龍之介「俊寛」は、利用している。

「かかるうき島の習ひにも、自ら慰む便りもやとて、少将は蜑の女に契りを結び給ひて、御子一人出で来給ひけり。後は如何成りにけん、そも知らず、夫婦の中の契りは、うかりし宿世と云ひながら最哀れなりし事どもなり。」（「源平盛衰記」巻第九「康頼熊野詣で附祝言の事」）

以上のような「源平盛衰記」の著述を踏まえて、芥川龍之介「俊寛」は、「足摺」（「平家物語」巻第三）の俊寛の有名なエピソードを独自な解釈で書き換えたのである。このことについては「盛衰記に現れた俊寛は、機智に富んだ思想家であり、鶴の前を愛する色好みである。僕は特にこの点では、盛衰記の記事に忠実だった。」（「澄江堂雑記」十二俊寛）と述べている。

前掲「清水茂『俊寛』像の系譜」に依れば謡曲「俊寛」一中節「俊寛鬼界の残菊」長唄「俊寛僧都雪姿視」は、いずれも内容的には「平家物語」「源平盛衰記」により大きな異同はないが、近松門左衛門の浄瑠璃「平家女護島」は典拠である「平家物語」「源平盛衰記」を大きく逸脱している。倉田百三、菊池寛、芥川龍之介等に俊寛についての創作の意欲を与えたのは、近松門左衛門の浄瑠璃「平家女護嶋」である。「平家女護嶋」（第二段「鬼界島の段」）は、謡曲「俊寛」に依ったもので歌舞伎の舞台で上演され有名になった場面で、芥川龍之介、久米正雄の二人に感動を与えた。

丹左衛門基康は、成経康頼二人の赦免状とは別に小松殿平重盛による俊寛僧都の赦免状をも別に携えて鬼界島を訪れる。正使基康は、成経の妻になった島の娘千鳥を同伴して四人を乗船させようとするが、副使瀬尾太郎兼康がこれを許さぬために俊寛僧都はこれを切り捨て自ら島に残る。「我が妻は入道殿の気に違うて斬られしとや。地三世の契りの女房死なせ。何楽しみに我一人京の月花見たうもなし。二度の歎きを見せんより。詞我を島に残し代わりにおこが乗つてたべ。」という発言の後に、「上使を切つたる科によつて。改めて今鬼界が島の流人となれば。地御慈悲の筋も立ち。お使の態度いさゝかなしと。」という言い訳があり、次に歌舞伎として上演された折久米正雄を感激させた詞書が来る。「地俊寛が乗るは引誓の船浮世の船には望みなし。サア乗つてくれはや乗れと。袖を引きたてやうやうに抱き乗せければ、せん方波に船人は纜といて漕ぎ出す。」

4

倉田百三「俊寛」菊池寛「俊寛」芥川龍之介「俊寛」三人の俊寛像についてこれから考察を進めるにおいて、最初に「一高時代の同窓の三人」の関係について最初に確認作業を行いたい。倉田百三は一高時代、同級の佐野文夫と同伴で放蕩生活を繰り返して卒業の半年前に結核のために第一高等学校を中退した。佐野文夫は盗癖により放校処分となるべきところを親友菊池寛の犠牲的行為により学業を続行するも、繰り返す窃盗行為により最終的に東大を中退した。（江口渙「わが文学半世紀」）

「出家とその弟子」（同人雑誌「生命の川」大正５五年１１月―大正６年３月、第四幕第一場まで掲載。「岩波書店」大正６年６月）倉田百三を一代の寵児にしたこの作品については、新思潮同人による断片的な回想が残されている。

「葬儀万端が終って間もなく、手紙附きの原稿が私の元へ届けられた。同学の一人からの手紙で、別封は御存知の倉田百三さんの処女戯曲、こんど貴誌では同人以外の新人の作品を募集されるという。是非この力作を御採用願いたい。作者がどんなにか感謝し喜ぶことでしょうとある。別封から出て来たものは戯曲『出家とその弟子』の原稿で

あった。」（「第四次新思潮」松岡譲）引用文中に夏目漱石の「葬儀万端が終わって間もなく」とあるから期間的には、大正五年十二月九日以降ということになるが、倉田百三「出家とその弟子」は、最初同人雑誌「新思潮」に掲載の可能性もあったのである。無名の倉田百三の作品を松岡譲に送った「同学の一人」というのは、第一高等学校時代倉田百三の親友であった佐野文夫の可能性がある。「出家とその弟子」（「生命の川」大正５年11月）の掲載時期と夏目漱石逝去の時期とが相前後しているが、松岡譲に記憶の錯誤があるかも知れない。

「ところが久米は倉田の戯曲なんかと、頭ごなしだし、芥川は鼻を抓んで顔をしかめて見せた。猛烈に反対したのは菊池で、あんな奴を有名にする為めに、我々が苦労して育てて来た雑誌を呈供するなんざ真平だと、喰ってかからん勢だ。余程の怨みがある風だった。作品公募の広告の手前、そんな乱暴は自縛に等しいと抗議しても無駄。とうとう三対一で、『出家とその弟子』はお流れとなった。」（「第四次新思潮」松岡譲）

第一高等学校時代井川恭と行動を共にして学業第一で日々を過ごした芥川龍之介にとって、佐野文夫と組んで放蕩を繰り返して結核により学窓を去った倉田百三は問題外であったであろう。佐野文夫のために第一高等学校を卒業直前に放逐された菊池寛にとっては、佐野文夫と終始行動を共にした倉田百三は唾棄すべき存在であった可能性がある。しかし「出家とその弟子」（「岩波書店」大正６年６月）が、大きな反響を呼び親鸞についての関心が高まり、結果的に倉田百三が第四次新思潮同人の誰よりも著名になったことは、菊池寛、芥川龍之介の二人に甚大な影響を与えたのである。

倉田百三「文壇への非難」（「帝国文学」大正７年３月）は、久米正雄、菊池寛、芥川龍之介に対する直接的な非難として見なし得る。

倉田百三「俊寛（第一幕）」（「白樺」大正７年３月）、「歌はぬ人『俊寛』所収」（「岩波書店」大正９年６月）出版は、菊池寛「俊寛」（「改造」大正10年10月）の執筆の直接の動機である。倉田百三「苦しめる俊寛」が菊池寛「苦しまざる俊寛」を生んだ直接の動機である。したがって両作品は、内容的に表裏一体の関係である。二人の俊寛は、典拠としての「平家物語」「源平盛衰記」を離れていることでは、近松門左衛門「平家女護嶋」と同じ範疇の作品である。

「近松と両氏との立場の相違は、盛衰記の記事の改めぶりにも、窺はれると云ふ事を妨げない。近松はあの俊寛を作る為に、俊寛の悲劇の関鍵たる赦免状の件さへも変更した。両氏も勿論近松に劣らず、盛衰記の記事を無視してゐる。しかし両氏とも近松のやうに、放免状の件は改めてゐない。与へられたる条件の内に、俊寛の解釈を試みる以上、これだけは保存せねばならぬからである。」（「澄江堂雑記」十二俊寛）

芥川龍之介「澄江堂雑記」の指摘のように倉田百三、菊池寛両氏共に大筋は、「平家物語」の登場人物たる俊寛像からは逸脱してはいない。倉田百三「俊寛」では、俊寛は飢えのために餓鬼道に堕ちて小鳥一羽を成経と争い、離島に一人残される不安のために成経、康頼の二人に友情を強要する。しかし最悪の運命は、最初から予兆、予感として訪れるのである。

「成経　わしはも一度繰り返して敢へて言はう。
　　あなたを一人見捨てて都へ帰るほどなら、
　　わしは此の島で餓死することを選ぶ。
康頼　生きるも、死ぬるも三人一緒だ。
俊寛　それを誓ってくれ。誓ってくれ。
成経　（弓を天にさゝげる）わしは名誉ある武士の裔だ。わしは弓矢にかけて誓ふ。あなたと生死を共にすることを！
康頼　わしは神々の名に依って誓ふ。天神よ。（天に息を吹く）地祇よ。（地に息を吹く）
　　わしは永久に友を見捨てませぬ。
俊寛　（静かに泣く）」（倉田百三「俊寛」第二幕第一場）

三人の流人は、最初強い結束と絆で結ばれている。この最初の場面は、近松門左衛門「平家女護嶋」にも同一場面がある。放免の使者が来て俊寛を含め、三人を連れ帰ろうとするが、成経と結ばれた千鳥の乗船を放免の副使瀬尾太郎兼康がこれを拒絶する。流人の三人は、強い連帯感で共に乗船を拒絶する場面がある。

「地両使詞をそろへ。詞最早島に用もなし。仕合せと風もよし地御乗船尤と四人船に乗らんとす。瀬尾千鳥を取って。引きのけ（中略）地流人は一致我々も帰るまじと。三人浜辺にどうど

座を組み思ひ定めし其の顔色。」（近松門左衛門「平家女護嶋」第二）

基本的には「平家女護嶋」と同じく「平家物語」からの典拠離れの構図を見せているが、倉田百三「俊寛」は、三人の流人と放免の使者基康の各人各様の性格悲劇の様相を示すのである。

「基康　わしは此命令の執達使に過ぎないのだ。わしは清盛殿の意志を貴方がたに御傳へすればそれでいゝのだ。貴方方がそれを受けようと受けられまいと、それはわしの立入る限りではない。」（中略）

成経　（四邉をはゞかりつゝ）わしは復讐する事が出来る。都へ帰れば機会を伺ふ事が出来る。（中略）

康頼　私が帰ったらきっと清盛殿に取計らうて迎への船を送ります。それを信じて待って下さい。」（倉田百三「俊寛」第二幕第二場）

放免の使者基康は、官僚機構の一翼を担う一人の命令伝達のための役人にしか過ぎない。俊寛に対して連帯を求め、鬼界島での残留を誓う成経、康頼の二人は、各人自分勝手な、実現不可能な理由を述べて都に帰還する。離島での二年間の三人での共同生活の後に俊寛一人だけが、さらに七年間の孤独の生活を送る。この間頼るべきでない僥倖を頼む自己の弱い心と慢性的な食料不足によって、俊寛の精神と肉体とは完全に崩壊する。

「俊寛　何百度欺されゝばいゝだ。康頼奴がなまじひに迎へによこすと云ったばかりに！苦るしまぎれにいゝかげんな事をいったのだ。其場限りの慰めだ。それが何の宛になるものか。それをお前は知ってるくせに、愚か者！未練なわしよ。あゝわしはもう自分に頼る気もなくなった。（中略）

何よりも苦しいのは食物がない事だ。わしはいつも餓鬼のやうに飢ゑてゐなければならない。（中略）

有王　成経殿は此度宰相ノ少将に昇られるといふ噂で御座います。平氏に刃向ふ事などは思ひもよらぬように見受けます。（中略）

有王　康頼殿は東山双林寺の山荘に籠って風流に身を窶してゐられます。鬼界ケ島での生活を材料にして寶物集といふ物語りを世に出されるといふ噂で御座います。」（倉田百三「俊寛」第三幕第一場）

餓鬼道に落ちながら肉体は衰弱し、二人の友人の空虚な言動を頼りに生きる事で自らの精神は荒廃し、生死の間を彷徨する俊寛を主観的に描いている。倉田百三「俊寛」は、自己の存在とこの世界に対する全否定の中で死んでいく。

「俊寛　あゝ此の世界をわしは憎む。わしが生きてゐる間、わしをいかに遇したか。それをわしは永劫に忘れぬぞ。此の世界は歪める世界だ。善が滅び悪が勝つ世界だ。（中略）信頼の怨霊よ。成親の怨霊よ。わしに憑け。（中略）清盛は火に焼けて死ね。宗盛の肖像の首は梟せられよ。維盛は刃に斃れよ。わしは清盛の女の胎を呪うたぞ。その胎より出づるものは水に溺れよ。」（倉田百三「俊寛」第三幕第三場）

倉田百三「俊寛」の造形には、上田秋成「雨月物語」（「白峰」巻之一）で西行の論理を怨念、情念により打破する崇徳院の論争の痕跡がある。「出家とその弟子」は親鸞の浄土真宗の衣装を装いながら内実は、阿弥陀による救いではなくキリスト教による救済であるように、「俊寛」の作中にも「あゝ仏様」という呼びかけに福音書の響きがある。

5

倉田百三「俊寛（第一幕）」（「白樺」大正７年３月）を読んで菊池寛が何故鋭く反応したか、数年後に菊池寛「俊寛」（「改造」大正10年10月）が、何故書かれたか。菊池寛が友人佐野文夫の窃盗事件に連座して第一高等学校を卒業直前に退学したことは、「半自叙伝」（「文芸春秋」連載）に詳しく、「青木の出京」（「中央公論」大正７年11月）にも虚構化されて記述されている。佐野文夫と放蕩を繰り返して結核のために学業を放擲した倉田百三が「出家とその弟子」（「岩波書店」大正６年６月）により若くして一世を風靡したことは、当時時事新報の一記者であった菊池寛の自尊心を傷つけたであろう。佐野文夫の窃盗事件には、友人倉田百三の妹が関係している。住み慣れた地を離れ、京都に一人都落ちして苦戦する日々は、「無名作家の日記」（「中央公論」大正７年７月）に詳しい。同じく第一高等学校を中退した因縁の

二人が、同じ素材で対峙することになった。菊池寛「俊寛」は、徹頭徹尾倉田百三「俊寛」に対する反措定である。

倉田百三「俊寛」が、「平家物語」を典拠に悲劇の人俊寛を近代に蘇らせた功績は多きい。

鬼界島での俊寛は、成経、康頼の二人の空虚な残留の空約束に裏切られ、帰還の後の二人に鬼界島での生活の更なる継続を期待して裏切られ、最終的に「清盛よ汝を地獄に伴ひゆくぞ。」という言葉を残して自殺する。「清盛は何故特別にわしを憎むのだ。」という俊寛の発言の根拠は、「康頼法師が事はさる事なれ共、俊寛は随分入道が口入をもって人となったる物ぞかし。それに所しもこそ多けれ、わが山荘、鹿の谷に城郭をかまへて、事にふれて奇快のふるまひ共が有けんなれば、俊寛をば思ひもよらず」（「平家物語」巻第三「赦文」）という清盛自身の発言である。

共同生活を離脱することになった時、成経が残留することになる俊寛に残した義理立ての言葉は、「わしは復讐する事が出来る。」である。そして康頼が俊寛に残した言葉は、「私が帰ったらきっと清盛殿に取計らうて迎への船を送ります。」である。この二人が、帰還していかなる生活を送っているか、その実態を有王の報告により聞いた時、俊寛は最終的に生きる希望を捨てるのである。「成経殿は此度宰相ノ少将に昇られるといふ噂で御座います。」「康頼殿は東山双林寺の山荘に籠って風流に身を窶してゐられます。」というのが有王の俊寛への報告である。倉田百三「俊寛」において彼を自殺に追い込み、その精神を怨霊と化すのは、清盛に対する憎しみであり、成経、康頼二人の俊寛の置かれている生活空間からの離脱、精神的離反、明白な裏切り行為である。

第一高等学校時代、佐野文夫と共に放蕩生活を繰り返し、結核により学業を放擲、小笠原、須磨で聖フランシス、福音書さらに親鸞に親しんだ過去の日々の反映が、倉田百三「俊寛」にある。親友佐野文夫からの裏切り行為により、倉田百三と同じく第一高等学校を放逐された菊池寛は、倉田百三「俊寛」の細部に挫折した著者自身の生の声を聞いたことであろう。「出家とその弟子」により文学的名声の頂点にある彼の肉体的苦痛に対して、長い雌伏の時を経て社会的名士に成りつつあった菊池寛は、別種の「俊寛」で反撃したと言える。倉田百三「俊寛」（「新小説」大正９年２月）を読んだ菊池寛は、「俊寛そのものゝ苦しみがよく描かれて居る」（「東京日日新聞」大正９年２月10日）と評価し、一年半後にこの作品に関して「どんな絶望の内にも人間的な生活の欣びはある」（「時事新報」大正10年12月６日）という感想を述べた。これは菊池寛「俊寛」（「改造」大正10年10月）創作後の歴史上の人物俊寛についての個人的な感想である。倉田百三「俊寛」では、「平家物語」の典拠を離れ俊寛は熊野権現を参詣し、成経とは彼の父の成親の行状をめぐり確執を繰り返して康頼の仲裁を受ける。

菊池寛「俊寛」は、倉田百三「俊寛」の反措定としての意味合いの作品ではあるが、倉田百三「俊寛」（第一幕）で繰り広げられる俊寛と成経の確執は、菊池寛「俊寛」の作中に反映している。「人間が、三人蒐まるときは、きっとその中の二人だけが仲よくなり、一人だけは孤立する傾きのあるものだが、」という作者の認識の下で俊寛は、三人の中で孤立する。これは成経、康頼の二人が鬼界島の現実の生活に直面しながら都での生活を引きずり、島の実情に直面することを無意識に避けているのに対して、俊寛一人が肉体で島の生活に向き合う事から来ている。倉田百三「俊寛」は、最後まで島の現実に向き合うのに都での生活の意識を離れることが出来なかったのとは、反対の生活態度である。

菊池寛は、佐野文夫と行動を共にした倉田百三に対して悪感情を持っていたが、「出家とその弟子」により名声を得た後の倉田百三に対しては、その才能に対して一目置いていたのではないか。倉田百三「俊寛」に対する菊池寛の感想は、偽りのものとは思えないが。「無名作家の日記」（「中央公論」大正７年７月）では、「藤十郎の恋」の素案を第四次「新思潮」編集部に送付して返却された菊池寛の苦い経験が、率直に綴られている。「半自叙伝」では、後年菊池寛自身が、「無名作家の日記」での芥川龍之介、久米正雄に対する悪意を撤回しているが、芥川龍之介亡き後、自己の社会的な名声を確立した後の話である。

菊池寛「俊寛」（全四章）は、第一章では成経、康頼の二人が過去の生活に引きずられて悔恨の念

に囚われて身動き出来ない状況の中で、俊寛一人が鬼界島の環境の中で新たな人生を模索している。第二章で二人が都に帰還した後、絶望の後に俊寛の肉体、精神はこの南海の孤島での生活で新生活を模索する。生き抜くための模索が、五官を鋭くして結果的に意識が過去の生活から遠のいて、過酷な孤島の現実を生き抜く。

「此の絶海の孤島こそ、自分に取って、唯一の浄土ではあるまいか。康頼や、成経が傍に居たために、都の生活に対する、いな人生に対する執着が切れなかったのだ。此の島を、仮のすみかと思へばこそ、硫黄ケ岳に立つ煙さへ、焦熱地獄に続くもののやうに、ものうく思はれたのだ。茲こそ、つひのすみかだ。あらゆる煩悩と執着と断って、真如の生活に入る道場だ。」（菊池寛「俊寛」第二章）

一時的な絶望のために海辺に転倒するも、榕樹から漏れる朝日の中で椰子の木の下の泉の水を飲んだ時から新生の道を模索する。第三章、第四章では、家を作り、食を求めて生活の実践により、過去の生活を過去たらしめるのである。

倉田百三「俊寛」が、過去を引きずり、過去の呪縛により身を滅ぼすのに対して菊池寛「俊寛」は、生活の実践の中で過去を切り捨てていく。共に第一高等学校を不本意な形で退きながら、そして共に作品創作時に社会的名声を得ながら、前者は過去を背負い、後者は過去を思い出の中に消し去った。菊池寛「半自叙伝」の記述によれば、佐野文夫の窃盗の罪を背負って第一高等学校を途中で辞めた事も、第四次「新思潮」に投稿した「藤十郎の恋」が、返却されたことも過去の回想であるが、「青木の出京」「無名作家の日記」を読むと菊池寛の佐野文夫と倉田百三、芥川龍之介への敵愾心は相当なものがある。「無名作家の日記」（「中央公論」）の掲載では、瀧田樗陰が芥川龍之介の立場を忖度して危惧の念を持ったほどである。原稿投稿者の掲載の可否の決定権を与えられた編集者の自惚れと過剰な自信は、いつの時代でもあることで、第四次「新思潮」を編集した芥川龍之介により「藤十郎の恋」を返却された菊池寛の怒りは激しく、この怒りが後年の「文藝春秋」の創刊につながり、死の一、二年前の芥川龍之介の窮状を見捨てる行為に繋がったかも知れない。

「Kは後年その著作で名聲を博したが、私はその人を信用する気には慣れなかった。と、云ふのも、私は、Kのさうしたロマンチックな企てのとばっちりを喰ったからでもあった。」（「半自叙伝」昭和３年12月）

菊池寛は、倉田百三については後年も批判的である。生活上の絶対的危機にあるときでも菊池寛の人生には、不思議に救いに手が差し伸べられている。

「どんな境遇にゐても、文筆を以て世に出られたと思ふほど、自分はうぬぼれてゐない。恐らく翻譯なんかで、やっと生活して、不平不満の結果、アナアキストにでもなつたに違ひないのである。」（「半自叙伝」昭和４年１月）

こうした作者菊池寛の認識が、菊池寛「俊寛」（第三章、第四章）に甚大な影響を与えているようである。俊寛は、成経や康頼の狩衣や刺貫を海に向って投げ捨て、鬼界ケ島での生活を妨げる彼等の記憶を消し去ることから始める。三人で過ごした小屋は焼き捨て、新しく自分で生活の場である家を作る。自分で作った弓矢で狩りをし、永良部鰻を捕獲し、自ら農作業に従事する。島の少女と生活を共にして五人の子供を儲ける。「彼は、鬼界ケ島に流されたことが、自分の不運であったか、幸福であったか分らないとまで、考えるようになっていた。」（菊池寛「俊寛」第三章）

鬼界島での労働の日々、時として過去の記憶が蘇ることがある。そして明日を生きようとする俊寛の意識を強制的に過ぎ去った日々に引き戻すことがある。そんな時、俊寛は、一層の労働により、自己の救済を図るのである。

「清盛に対する怨や、妻子に対する恋しさが、焼くように胸に迫ることがある。そんな時、彼は常よりも、二倍も三倍も烈しく働く。（中略）昼間の烈しい労働が産む疲労は、直ぐ彼を、そうした寂しさから救ってくれ、そして彼に安らかな眠りを与えてくれる。」（菊池寛「俊寛」第三章）

この箇所は、あらゆる苦悩は労働によりのみ救済される（「思い起こせば、先ず身を起せ」）というニーチェの警句を菊池寛流に書き換えた箇所である。

鬼界島の俊寛が労働により苦悩から解放される姿は、中島敦「光と風と夢」「悟浄出世」「李陵」創

作に多大な影響を与えた。「太陽の熱が、段々冷却すると、地球も従って冷却し、終には人間が死に絶えてしまふ。」（「無名作家の日記」）、このアナトール・フランスの警句は、中島敦「狼疾記」にそのまま使われている。「生ある間は死なし。死到れば、既に我なし。又、何をか懼れん。」（「梧浄出世」）は、菊池寛「（死の恐怖）雑誌「話」昭和13年９月」の中島敦による再引用である。後年、中島敦に影響を与えた思想について菊池寛は、何から知識を得たか。

「それから、一年生のとき、福間博と云ふ先生が『ゲラーデアウス』と云ふドイツ語の教科書を使った。これは、ドイツの社会思想家のギチイキイとか云ふ男の随筆集で、社会主義的な警句集であった。」（菊池寛「半自叙伝」）

森鴎外「二人の友」の一人である福間博が、知識の出所ではないか。菊池寛「俊寛」（第三、四章）は、典拠離れがはなはだしい箇所である。有王発言の趣旨は同じであるが、俊寛の実態は全く異なるのである。「こは現にて候なり。さてもこの御有様にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ、不思議にも覚え候へ」（「あなあさましや。などかくは、変らせ給うぞ。法勝寺の執行として時めき給いしき君の、かくも変らせ給うものか」）

「片手には荒海布を持ち、片手には魚をもらうて持ち、歩む様にはしけれども、はかも行かず、よろよろとしてぞ出で来たる。」（「彼は、生え伸びた髪を無造作に蔓で束ねた。六尺豊かの身体は、鬼のような土人と比べてさえ、一際立ち勝って見えた。」）

「平家物語」から菊池寛「俊寛」への変容は、生活第一主義を掲げる菊池寛の芸術観の直接の反映である。「俊寛は逞しい腕を組みながら、泣き沈む有王の姿を、不思議そうに見ていた。」（菊池寛「俊寛」第四章）という記述に不如意な生活の中から自己の運命を切り開いてきた菊池寛自身の意識の反映がある。

「平家物語」が伝える悲劇の人物俊寛は、近代文学において多く創作の素材となって来た。「彼俊寛僧都は、村上の帝第七王子。二品中務親王具平六代の後胤、仁和寺の法印寛雅が子、京極の源大納言雅俊卿の孫也。」（「源平盛衰記」巻第三「成親謀叛の事」）

皇統に連なるものが、絶海の孤島鬼界島で一人取り残されて不本意な生を終わったという経歴が、多くの作家の関心を引くのであろう。倉田百三「俊寛」菊池寛「俊寛」は、共に第一高等学校を中退して挫折の苦痛を味わった二人による作品形象化であり、二人の作家の生の苦痛が、歴史上の人物俊寛の人物造形に多大の貢献をしている。二作品は共に文学作品としては優れているが、芥川龍之介「俊寛」は作品としては見劣りする。挫折を知らない芥川龍之介の経歴が、俊寛についての理解を阻んだと解釈できる。